

第2回館長講座 『縄紋時代はどういう時代か』

司会：こんにちは。本日は小雨降る中、お集まりいただきまして誠にありがとうございます。

本日の第2回館長講座は『縄紋時代はどういう時代か』と題しまして、当館の鷹野館長よりお話いたしますので、よろしくお願いします。

(拍手)

館長：こんにちは。第2回の館長講座を始めさせていただきます。

今日は、先ず、世界史の中での縄紋時代の位置付けということで、時代区分のことからお話をさせていただきます。

まず、時代を区分する時に使われる時代の名称ですが、これは日本の場合、いろいろな観点から付けられています。

時代を社会形態などから見るときには、原始時代・古代・中世・近世・近代・現代とか、あるいはまた封建時代という言い方もそういう観点からのものかもしれませんが、日本の歴史時代については、権力の所在地と言いますか、そうしたところからいろいろ名前が付けられています。

奈良や京都に都があった時代の奈良時代、平安時代。武家政権になって、鎌倉に頼朝が政府を開きますと鎌倉時代、それから室町時代、そして江戸時代と、これは権力者、支配者がどこに居たかということと呼ばれています。

また、年号によるものもあります。飛鳥・白鳳時代というときも、飛鳥は権力の所在地なのかもしれませんが、白鳳文化というときの白鳳、それから、奈良時代の中でも、天平文化という言い方をする天平時代、これは、天平という年号があった時代です。

近いところでは、明治・大正・昭和時代、将来は今を指して平成時代というようになるのでしょうか。

また、それぞれの時代の特徴的な出来事と呼ぶ言い方もあります。ここで見ていくところの縄紋時代もそうでしょうし、古墳時代とか、それから室町時代の後半以降を戦国時代といいますし、かつて、バブル経済の頃は昭和元禄なんて言い方をされたこともありました。

日本史の時代区分の中で使われる名称というのは、このようになかなかごちゃごちゃになっていまして、一つの統一した基準のもとで呼ばれているというわけではないんです。

仮に、私がこれまで生きてきました60数年間というのを現代と仮定すると、将来、この現代というのは、昭和時代の後期というのと、平成時代というような分け方がされて語られるのではないかと想像しています。

そして、平成時代は、バブル経済崩壊後の経済状況の中での生活という括り方ができるのかもしれませんが。こういったことは、後世の歴史家が考えてくれることかなと思います。

ところで、大きく世界史というか歴史を眺めてみたときに、時代を区分する根拠として、文献資料があるかないかということによって、区分するということが行われています。

ここに書きましたが、先史時代・原史時代・歴史時代という呼び方です。

先史時代、英語では^{プレヒストリー}prehistoryと言いますが、これは「人類が文化を創造しているけれども、文献の

資料は全くない時代」です。日本列島で言えば、縄紋時代とそれ以前、それから、一部、弥生時代も含まれている、そのくらいの時期を先史時代と言います。

それに次いで、原史時代^{プロトヒストリー}protolitheryですが、これは「文献的資料が断片的に存在する時代」です。これも日本で言えば、弥生時代の大部分と古墳時代が、正にこの時代です。

それから、歴史時代、これは「文献によって歴史を記述することのできる時代」です。もちろん、現代の歴史学というのは、歴史時代と雖も、文献だけで歴史を構築するということではない、これは前回、お話ししたとおりであります。

ところで、日本には文献はない弥生時代を、原史時代、断片的に文献資料が存在する時代だとするのは、これは日本列島の中には文献はありませんけれども、お隣の中国の歴史書の中に日本列島の弥生時代についての記録が見られるからです。

弥生時代のものとして出土する土器にも時々文字があるという報道がされたりすることがあるんですけども、そういう文字といっても出てくるのは、例えば「田んぼ」の「田」とかですが、これは文字というよりも単なる記号みたいなものにも考えられるわけです。無理やり文字と考える必要はなく、だから、弥生時代の日本列島の中には文献というか、文字資料はないと言っていいと思うんです。

中国の文献では、漢書巻 28 下地理志^{えんち}燕地の条というところに、「楽浪海中^{らくろう}ニ倭人^{わじん}有り。分カレテ百余国ヲ為ス。歳時ヲ以テ来リ献見ス」という記述があります。

この地理志燕地^{えんち}の燕というのは、今の北京あたりを指してしまして、それから、楽浪海中というのは、朝鮮半島の根元、大体、今の平壤^{ピョンヤン}あたりの楽浪郡のさきの、朝鮮半島の向こう側に倭人の住むところがあり、その倭人の住むところは、「分カレテ百余国ヲナス」とあります。この国というのは今と概念が違うのかもしれませんが、その国から「歳時ヲ以テ来リ献見ス」と、折を見て朝貢して来るといった記載があります。

次いで、後漢書後漢書巻 85 列傳巻 75 東夷伝には、「建武中元二年、倭奴国^{わつぎ}ヲ奉ジテ朝貢ス、使人自ラ大夫ト称ス、倭国之極南ノ界ナリ、光武、印綬ヲ以テ賜ウ」という記録があります。

建武中元二年というのは、中国の後漢の年号ですが、紀元後 57 年、倭の奴国^{わのな}というところから、使者が来て、その使者に対して、当時の皇帝・光武帝が、印を授けたという記録であるわけです。

江戸時代になって、福岡県志賀の島から金印が発見されて、これが事実だったということがほぼ証明されています。この記事による金印だとされる「漢倭奴国王^{かんのわのなのこくおう}」の金印が出てきているわけです。

こういう記録では、その他では有名な魏志倭人伝^{ぎしわじんてん}がありますが、その中にも 2 世紀、3 世紀くらいの日本列島の様子というのが書かれていますし、さらに古墳時代になりますと、これらの中国の記録に加えて、出土した鏡の銘文であるとか、それから、千葉県の市原市の稲荷台古墳^{いなぎ}というところからは王賜銘鉄剣^{おうしめい}、王が賜るといった文字が書いてある鉄剣が出ていたりしています。

また、ここに出しておりませんが、埼玉古墳群の稲荷山古墳^{いなぎ}の金錯銘鉄剣^{きんさく}には、文字だけではなく、文章があるんですね、日本列島の中の記録ですが、部分的に出てくるわけです。

こういう記録はありますけれども、こういった記録だけで歴史が叙述できるかということ、これはまだまだ語ることはできなくて、大部分は発掘資料によるわけです。

こうした記録・銘文などが全く出ない時代、それが先史時代ということになります。

世界史の中で、先史・原史時代の時期区分に最も一般的に用いられているものが、三時期区分法と呼ばれるものです。

三時期区分法は、デンマークの国立博物館におりました、クリスチャン・ユルゲンセン・トムセン (C. J. Thomsen) によって考案されています。

トムセンは、レジュメの写真の下に 1788～1865 年とありますが、大体 19 世紀の前半に活躍していたのですけれども、どういふことからこの三時期区分法ということ考えたのかと言いますと、博物館に収蔵されていた資料を整理していく中で、そういった資料・遺物を材質によって分類したわけです。

トムセンの記述を見ると、「石の時代」それから「青銅の時代」、「鉄の時代」と分けまして、先ず、最初の「石の時代」と呼んだ時期の出土品、これには金属製品が含まれていない。次の青銅製の出土品は、鉄製品と一緒に出土するものと、青銅だけが出土する遺跡からのものとあり、同じ青銅製のものであっても、違いがハッキリ区別できる。それから、鉄製品は、歴史時代の最古のものだとされるものと、そういう時期の製品と非常に良く似ているという特徴を持つということを識別したわけです。

そして、全体を「石の時代」、「青銅の時代」、「鉄の時代」に分け、石器時代室、青銅器時代室、鉄器時代室と区別して、博物館の展示を行いました。

この展示室を 3 つに分けたことが、トムセンの三時期区分法の最初の応用ということになるわけです。

トムセンの説明する各時代ですけれども、先ず石器時代です。

ここでは、「武器と道具が石や木、骨などで作られ、金属はほとんど使われてないか、あるいは全然使われていない時代である。石器が普通に使われていた時代のあったことは疑い様がない。それが我々のいるこの地方に人間の住んでいたことの判明する最古の時代である。」という説明をしています。

武器と道具が、石や木、骨などで作られています。武器や道具、要するに利器ですね、刃物、その類が石でありますこの石器時代が一番古い時代であるという説明です。

それに次いで、青銅器時代ですが、青銅器時代は石器時代に続く時代であります。

「この時代では、武器と切る道具は銅か青銅製であり、鉄と銀は確認されていないか、確認されていてもごくわずかである。最初に記録され、使用された金属が銅か青銅であることは、北部ヨーロッパだけでなく、南部ヨーロッパの各地においても認められる。

ずっと後になってようやく鉄が知られるようになる。自然銅が鉄よりもはるかに簡単に金属と見分けられる状態で発見されること、鉄を細工できるようにするには先ず強い熱で溶解しなければならず、その方法というのは、この時代にはまだ知られていなかったに違いない。」

銅は自然の状態では、錆びていれば緑色ですね、^{ろくしやう}緑青をふいています。一方、鉄は自然の状態では錆びていくと茶色ですので、土の中にあってはあまり見分けが付かないであろうということを言っているのだと思います。見分けやすいという状態で、銅というのは存在します。

それから、温度ですね、鉄の溶解する温度、^{ゆうてん}融点 1500 度あまりですが、銅は 1000 度あまりくらいで、溶解するというので、銅のほうが低い温度で溶けるということは、細工しやすいということになるわけです。鉛とか亜鉛とかは、もっと低いんですけど、それで、銅と鉛と一緒にしてみたりというような、黄銅とか青銅とかいうような合金としても使われるようになってくるわけです。

金属としては、銅か青銅が最初に使われたんだということです。

そして、鉄器時代です。

「鉄器時代は第 3 番目である。この時代には、鉄が最適のものは鉄で作られており、それらでは鉄が銅に取って代わっている。刃のある武器や道具は当然全てそれにはいる。この新しい時代でも、装身具、そして柄、スプーンのような何種類かの家庭用品などには以前と同じ様に青銅が使われた。」

鉄器時代だからといって青銅を使わなくなるわけじゃありません。銅や青銅のほうが細工しやすいということから、装身具にはまだまだ銅や青銅が使われています。鉄器時代は鉄だけが使われていたわけじゃないんです。ここでも刃のある武器や道具、利器には鉄器が使われます。

こういうふうにトムセンの区分というのは何よりも武器・利器・刃物の道具を基準として、これらを捉えて区別しているということが言えます。

この三時期区分というのは、トムセンはデンマークですが、北部ヨーロッパで典型的にみられました。ところが、ドイツ南部などでは、こういうような順序が必ずしも明確ではなかったという事情があり、その点で、かなり強固な反対にも合いました。

それから、1864 年にドイツとデンマークが戦争をしているんですけども、そんな感情もあり、民族的な対立というのも加わりまして、この三時期区分がヨーロッパ中に通用するものとして確立するには、多少、時間がかかっています。

しかし、トムセンやトムセンの後継者たちが、遺跡の発掘調査を重ねる中で、^{層位的}にも実証されていきまして、この三時期区分というのが、近代考古学の礎石となっていきます。

この三時期区分の確立以後、^{更新世}の人類が確認されていくというようなことが重なって、トムセンの最初の区分、つまり石器時代が、他のふたつの時期に比べると、途方もなく長い期間続いたということが、だんだんわかってきます。

そして、また、更新世の人類とそれ以後の人類の間にも、いろいろ違いがあり、道具、それから生活方法が違うようだということが明らかになっていきます。

そうした中で、1865 年にイギリスの銀行家で人類学者・考古学者でジョン・ラボック (J. Lubbock) が、^{プレヒストリック タイムズ} “Prehistoric Times” という書物を著します。この書物の中で、石器時代を「旧石器時代」と「新石器時代」と分けようと、Palaeolithic Age と Neolithic Age の二つに分けて考えようということを提唱します。そして、この旧石器と新石器という考え方が、やがて広く受け入れられていきます。

ラボックの分けた新石器時代と旧石器時代の区分ですが、先ほども言いましたように、トムセンの 3 時期区分は、単純明快な基準で、武器・利器・刃物、この材質の違いによって分けていたのが、ラボックの新石器と旧石器の区分では、別々のいくつかの基準を組み合わせて考えられました。

先ず、技術的な点、道具を作る技術です。道具は石で作るんですけども、打ち欠いて作る打製石器と、磨いて作る磨製石器があり、その磨いて作る磨製石器が現れるのが、新石器時代になってからです。

経済的な観点では、狩猟・採集によって自然界から食料を獲得するのが獲得経済と言われる旧石器時代で、新石器時代になりますと、農業や牧畜などが行われて、計画的に食料を得られるようになる。狩猟・採集による旧石器時代と、農業・牧畜による新石器時代とします。

それから、もう一つ、地質学による現生の動物層とともにあるのが新石器時代であり、すでに絶滅した更新世の動物層と共存して発見されるのが旧石器時代であるとなりました。

この3つ目の基準、地質学上の基準というのは、大体、地質学者のほうで、地球全体がほぼ同時に終わったと考えていた更新世と旧石器時代を一致させるという意味があり、こういったところがよく実情に合っていたということが言えるようです。

と言っても、矛盾も出てきます。ラボックの新石器時代になりますと、土器や織物が作られ、それらが使われるようになってくるといふ説明がされています。旧石器時代には、土器や織物がない。

当初は、これらの基準、土器があり、磨製石器を使い、織物があり、それから完新世、これが新石器時代の特徴であるといふふうに考えられていましたが、必ずしも地域によっては、これらが全部そろっている、一斉に出てくることでもないということが、明らかになっています。

ヨーロッパにおいても、更新世の終わりと農耕集落の出現の間には、かなり長い時間の隔たりがありますし、あとでまた出ますけれども、日本列島でも同様です。

縄紋時代も、土器があり、磨製石器を作っていますが、ただ農業はやっていない、狩猟採集経済というようなところで、どうも完全に旧石器時代、新石器時代といふふうに、サッと分けるというわけにはいかないんだろうということが見えてきます。

そうした中で、「旧」と「新」の間に「中」を置こうという提案が出されます。

「中石器時代」^{メソリシック エイジ} Mesolithic Ageの提唱です。これは、こういった問題点を解消する方法として考えられたんですが、フランスの考古学者のジャック・ド・モルガン (J. de Morgan) が “Les Premières Civilisations” (原初文化) という書物を1909年に書いています。この本の中で旧石器時代と新石器時代の間の中石器時代を置こうという提案をしました。

ド・モルガンの提唱した中石器時代は、石器は依然として打ち欠いた打製石器ですが、非常に細かい、^{せきじん}石刃と書きましたが、石の小さな破片、剥片です。大人の指の爪くらいの大きさの小さな剥片を軸にはめ込んだりして、組み合わせて使うというようなものでした。

具体的な道具は、こんな道具でありました。左は、これは鎌ですが、木の軸に細かい石器をはめ込んで、接着剤などで鎌にしており、右は、札幌の北海道博物館に展示されている資料ですけれども、この軸に細かい破片をはめ込んでいって、槍として使います。

こんな細かい石器を使うものですから、^{さい}細石器文化、細かい石器、^{マイクロリス}microlithといいますが、細石器文化とも言われています。

ド・モルガンの説明では、この時代は経済的には狩猟採集であるけれども、土器は製作されて、犬も飼育されていたという暮らしだったとされています。

現在、この中石器時代というのが、これもまた、世界中どこでも中石器時代があったのかどうなんだろうかということが議論されたりしています。でも、おおまかに「旧石器」、「中石器」それから「新石器」という時代区分がされて来ているわけです。

それでは、わが日本列島の縄紋時代というのは、一体、どうなんでしょうか。

世界史的に見たときに、縄紋時代というのは一体、今まで見てきたどの段階に属するのであるかということですが、縄紋時代は当初から土器があります。磨製石器は、日本列島では土器以前にすでに存在しています。石全体を磨くというよりも、部分的に磨いて作るという石器が流行った時期もあり、それは土器が出てくる前です。それから、犬が飼われています。時間的にはいろいろあるようですけど、大まかにいうと、完新世になってからものです。経済的には、これは明らかに、狩猟・漁撈・採集という、採集経済というものです。

はっきりしていることは、農業は行われていない。農業というような、計画的に収穫してというものは無いということです。ただ、農業はないのですが植物が栽培されていたということは、明らかなようです。ヒョウタンとか、リョクトウといった植物が栽培されていたということは言えるようです。でも、リョクトウ、豆ですが、これが主食かという、そうではなくて、今の我々の感覚からすると、おかず的な植物としての栽培はあったとっていいようです。

こうして見ますと、今まで見て来たような「旧石器」、「中石器」、「新石器」という時代の中で、こういった形の文化があてはまるものはなく、強いて当てはめるとすれば、農業の存在というのを別にしますと、大体において、新石器時代の枠で捉えておけばよいのではないかと思います。

そもそも、この「旧石器」、「中石器」、「新石器」という区分はヨーロッパで考えられ、作られてきた概念ですので、これを地球規模で、地球全体に及ぶというのは、これは相当無理があるんだろうかと思えます。縄紋時代というのは、きわめて周辺的な新石器時代に相当する時代の文化と言っておけば、いいんじゃないかと思えます。

ところで、今、縄紋時代に土器があると簡単に言ってしまったんですけども、実は逆でして、土器がある時代が、縄紋時代なんです。

でも、土器がある、これは縄紋時代だけじゃないのではないか、その後の弥生時代にも、それから古墳時代にも、現代にも、土器とは言いませんけれども、陶器・磁器があるんですね。

全く、そのとおりなんですけれども、弥生時代・古墳時代にも、それからまた現代についても、それぞれの時代にはそれぞれの時代を定義付ける指標というのがあるわけです。

いろいろ議論があるとは思いますが、簡単に言ってしまうと、弥生時代というのは、今のところ、日本列島の人たちが米作りを始めるというところを指標として考えてよいだろう、米作りという生産の形に求めるのだとしています。具体的には、生産に関わる、例えば石包丁のような道具の出現、それから生産遺構そのものである水田というのが出現する、そういうところをもって、弥生時代が始まるという考え方がされています。

ただ、弥生時代の始まりという時点は、日本列島一斉なのかということについては、ちょっと疑問があるところなんです。

今のところ、一番早く米作りが始まったのは、九州の一角だろうとされていますが、それから東北地方の、青森県の田舎館いなかだてとかいったところまで、米作りが伝わるのには、結構、時間かかっています。

そうしてみると、九州の一角で米作りが始まっている、その時点から日本列島が弥生時代という考え方はしないで、それぞれの地域で米作りが始まってから、弥生時代と考えていいのではないかと思います。縄紋時代の水田などということを使う人もいます。

また、古墳時代を定義付けるもの、時代の指標というのは、前方後円墳の出現をもって古墳時代とするという決め方がされているようです。

前方後円墳が出土した時、日本列島の一角に作られた時、それから全部が古墳時代かということ、そうじゃないだろうと、東北地方には会津大塚山古墳という前方後円墳がありますけれど、こういったものができるまで、畿内地方で前方後円墳が作られてからの時間の差というのが随分あるんです。

それからまた、前方後円墳と言いまして単に古墳と言っていない。弥生時代にも古墳みたいな高塚という盛り土をもったお墓は作られなかったのかということ、そうではないらしいです。卑弥呼のお墓は径百歩の高塚だと書かれています。径百歩、歩いて100歩、大体100メートルくらいの大きさを持つお墓だろうと言われていたんですが、魏志倭人伝の卑弥呼の記録というのは、239年ですね、3世紀の前半となっています。

だいぶ長く、3世紀くらいまで弥生時代だと言われていたもので、卑弥呼のお墓というのは、古墳ではない、弥生時代の墳丘墓だと考えられていた時代が長かったんですが、最近はどうも、卑弥呼の墓も古墳時代だと捉えていいんだろうとなってきたようです。

だから、邪馬台国の時代というのは、古墳時代の中に入れて考える人もいます。

弥生時代と古墳時代はこういう決め方で、縄紋時代については何で決めるのかということ、縄紋時代については、これは土器で決めるものだと。

縄紋土器といいますけれども、縄紋土器というのは、縄紋の付いた土器だというふうに考えるのが普通だと思うんですが、しかし、縄紋のない縄紋土器も縄紋時代にたくさんあるんです。

むしろ、西日本では、縄紋のない縄紋土器のほうが普通だと言われるかもしれません。日本列島中の土器が縄紋のついた土器になるのは、縄紋時代の後期前半くらいには日本列島の大部分で縄紋が付けられるようになるんですけれども、縄紋のない縄紋土器もあります。

日本列島の石器時代の土器、これを縄紋土器と言い、その縄紋土器、要するに土器がその時代の文化の特色をよく表している時代、これを縄紋時代と呼びます。

めんどくさい言い方かもしれませんが、縄紋土器の使われていた時代が、縄紋時代だと。

日本列島に土器が、出現してというか、伝わって来てというか、両方の考え方があるようですけれども、現れてですね、弥生時代、つまり米作りが始まるまでの間、これが縄紋時代です。

縄紋時代になって、それ以前と何がどういふふうに変ったんだらうということなんですけれども、いくつもあると思うんですが、ここでは二点見てみます。

縄紋時代になりますと、日本列島の住人たちは土器を手に入れます。それから、もう一つ弓矢を使うようになったということでしょうか。この土器を使い、弓矢を使うということになってきて、それ以前とは異なる生活の形が出てきたと言っているようです。弓矢は、簡単に言うと、獲物の捕り方が変わってきますし、土器もそうですね、獲得した食料をどういふふう調理するか、食べるかという方法も変わってきます。そのことによって、比較的定住的な生活というのが可能になっていくというのが縄紋時代だらうということです。

すみません、レジュメで大きな間違いをしまして、縄紋時代の紋を文にしていますが、これも間

違いです。それから、石鏃^{せきぞく}が幅1mと書いてしまいましたが、10mm前後というふうに訂正願います。

弓矢も手にするようになり、ヤジリが遺跡から出てくるわけですね、石鏃というのが出てくるわけです。また、言葉にこだわりますが、ヤジリはどうして、ヤジリというんでしょうか。石鏃は、英語でarrowhead^{アローヘッド}というから、頭ですね、それが、なんで尻なんだろう。

日本語の面白いところ、おかしなところかもしれませんが、ともかく、石鏃が出てくる。石鏃と同じような遺物が、旧石器時代にもあって、図に示したのは、旧石器時代に出てくるこういう形のものが有舌尖頭器^{せつせんとうき}と呼ばれる石器です。ヤジリもこういう形であるけれども、大きな違いは大きさです。今、言いましたように、石鏃、矢の先に付けるものは、大きくても、幅は10mm、1cmくらい、もうちょっと大きなものもあるんでしょうけど、大体そんなもんです。それに対して、有舌尖頭器というのは、この幅がもっと大きくて、これを飛ばすことはできない。この有舌尖頭器と呼ばれる道具の使い道は、ナイフみたいなものだというふうに考えられています。

この弓矢を手にするとどういうふうなことが変わってくるかという、獲物に近づかなくても仕留められるわけです、遠くから射ることができる。

ちょっと面白くなって、狩りの絵、狩猟の様子を絵ってどんなのがあるか探してみたんですが、まずは、旧石器時代の狩猟の想像図ですが、集めてみました。

これは「野尻湖キルサイト」という説明のある絵で、旧石器時代の長野県北部にあります野尻湖での象狩りの想像図です。この後に出てくる絵でもよく見られるんですけども、旧石器時代ですね、旧石器時代という、もしかすると氷河期にかかる時期だろうと。今と比べると、はるかに寒いはずですが、これで、このような格好でいられるのかなと思います。

それから、これは学研の子ども向けの『遺跡・土器・石器』という図鑑の中にあつた絵なんですが、とてもたくましい男たちが槍を投げつけることで、狩りをしています。投げつけて、刺して仕留めます。これも、この人は毛皮を着ていますが、あとの人は、腰のまわりだけです。

日本列島だけかと思ったら、これは群馬県立自然史博物館で、「コロンビアンモスを狩る」という題のジオラマです。コロンビアンモスというから、日本列島ではないんでしょうね。このように、槍を投げつけて、象を狩っています。ふんどしだけはしているんですけども、寒くないのかなと心配をしてみます。

旧石器時代の狩猟の場面を描いたものや、記したものというのは、みんな相手は象なんですね。

この兵庫県立博物館で「自然にいとむ狩人たち」という題を付けられたジオラマですが、これはナウマン象のハンターですから、旧石器時代の象です。

しかし、象ばかりが対象じゃなかったわけでしょうけれども、槍という武器を持って、獲物に近づいて行って仕留める、そういう形での狩りなんでしょうね。

もちろんそれ以外にも、罠を使ったりとかいう狩猟の形というのも想定できるんでしょうけれども、確かな証拠というのが果たしてあるのかどうか。

縄紋時代の狩りを探しましたら、これは同じ兵庫県立考古博物館ですが、「縄紋時代の狩り 森と海に生きるナチュラルリスト」で、縄紋時代の自然にしたがって生活していたことを示しているのかもしれませんが。お父さんと子どもと犬がいて、イノシシを狩っています。縄紋時代の狩りという、大体イノシシが出てきます。後で見ていただく当館の展示にも、イノシシが捕まえられています。

縄紋時代の狩猟対象となる主な対象となるのは、出土する骨から見ますと、イノシシとシカが主なものです。

当館の総合展示室の中に、ヤジリの刺さったシカの骨、これが展示されています。もちろん、複製ですけれども、これを見ますと、ヤジリの刺さった骨の位置を見ますと、後ろから狙って撃っているんです。正面からというよりも、後ろから、そっと狙っているんじゃないかということが想定されている例が展示されています。さっきの象狩りみたいに、近くまで行って投げつけて、というようなことしなくとも、遠くから狙えるということができたようです。

これは国立歴史民俗博物館の山田康弘さんが漫画を交えて書いているんですけれども、この中にも狩りの絵があるんです。右上に、弓矢を使ってシカを捕っている絵があります。左下は、これから狩りに行くのか、狩りから帰って来たのか、犬を連れていきます。

先程、中石器時代の展示の中に犬が飼われていたとありましたが、縄紋時代にも、犬が飼われていました。当館のジオラマの中の犬は、ウーウーとうなるパターンと、ワンワンと吠えるパターンと、二つあるようです。吠えるワンワンというときには、優しい声がしていますので、多分あのジオラマの左のほうに女の人がかごを持って帰って来ていますけど、それをお迎えする時なのかなど。うなっているときは、部外者を警戒するのかなということなんです。

縄紋時代の犬、縄紋犬といいますか、この場面にあるとおり、狩りのときに活躍するだけでもなかったようです。というのは、これも当館の里浜貝塚の展示の中に、犬の埋葬の様子というのが展示されておりまして、犬が埋葬した形で見つかるんです。

普通、獣の骨というのは、イノシシにしても、シカにしても、そのままの形で見つかるのではなく、食べますから解体するんですね、骨がばらばらになって出てくるんですが、犬の場合には、ちゃんと、頭のある場所には、頭があり、そのままの形で葬られています。解体されて食べられてはしていない。中には食べたものもあるのかもしれませんが、きちんと埋葬されているものがたくさんあります。埋葬されていた犬の骨の中には、脚が折れているものとか、非常に老犬、おじいさん犬ですね、狩りに連れて行っても役に立たないだろうと思われたり、脚が折れて、そのまま癒着し、曲ってくっ付いてしまい、多分、歩くときにはびっこを引きながらという形で歩かざるを得ない、そういうような犬も埋葬されているんです、つまり、ちゃんと飼われていました。

単に狩猟のためだけというのではない、でも、ペットというほどでもないでしょうが、縄紋人の生活の友といってもいいような存在の犬が結構いるわけです。

犬と人が、非常に近い関係にあったということが、埋葬された犬からは見て取れます。

そして、弓矢とは、直接関係ないんですけれども、縄紋時代の狩りの形態の一つに、落とし穴猟があります。これは総合展示室のパネルです。ここに穴があってイノシシが落とされています。

下から尖った杭^{くい}が出ていたりしています。これは、穴の一番底に、また小さい穴が開いているということで見分かりますし、それから落とし穴を半分にカットして、半分だけ、土層を観察しながら掘ると、中にこういう黒い土が立っているということがあります。こういうところに杭を入れたんだと、そういう発掘の場面から分かります。

これはイノシシを落としていますが、鹿児島県^{いぶすき}の指宿市にあります指宿市考古博物館の展示物なんですけれども、これも、今言ったように半分に割って土層を観察しながら掘って行ってこういうのが見られるんです。

それから、上の写真はこんな形で発掘されますということなんですけれども、お茶の水女子大学で、寮を作るときに、こんな落とし穴が、20m×20mくらいの範囲で、3つほど出て来ています。時期は解らないんですが、これは、確か^{せきふ}石斧、石オノなんですね、縄文時代の早期か、前期のものかと見えます。この落とし穴は割合に、底が広いです。

この一つ前の、当館の展示のものも底が広がっているんですけれども、底の部分がものすごく狭いものがあるって、漏斗状に掘って底だけギュッと狭くする。どのくらい狭いというと、足が入るか入らないかくらいの幅ですね、こういうイノシシなんかよりも、もっと脚の細い動物、具体的に言うとシカなんかをターゲットにしているんじゃないかと思います。

さらに尖った杭が立っていますけれども、これで別に殺傷しなくてもいいんですね、細い穴、そこに足が挟まっちゃうと、シカの脚なんか、抜けにくくなってきます。それから、これもそうなんですけれども、脚が引っかかる、こういう杭が邪魔して、出にくくなるということだけでもいい、落ちてもがいているだけで、あとで捕まえてもいい、あとで人が行って、ポコッとやって運んで来ればいいわけで、そういう狩りができるようになってきています。

今も、底のところが非常に狭くなっているものというのは、北海道なんかによく見られる、明らかにエゾシカ、シカですね、これを対象にしたもので、北海道では縄文時代だけに限らず、近世のものまであります。

縄文時代の落とし穴というのが初めて確認されたのが、横浜市にあります、霧ヶ丘遺跡というところなんです。この白い、丸いところがみんな落とし穴で、1970年頃でしたでしょうか、これは縄文時代の遺構であるというのが確認されています。これは、最終確認された遺跡の写真です。もちろん、たくさんありますけど、これがいっぺんに存在したというわけではないと思います。時間を経て、最終的に我々の目に触れる形は、こういう形のものだといえます。

私自身も、落とし穴のある遺跡の調査をしたことがありまして、これは千葉県市原市^{ぼうきく}の坊作遺跡というところなんですけれども、水場をめぐるって、この範囲にあるもの、これはみんな落とし穴ですし、それからこう一列に並んでいる、これも落とし穴、この水場というのを相当意識して、そこに来る動物たちを捕まえられるような、極端にいうと、水場をめぐるって同心円になるような並べ方ということをしていました。当然、動物たちの通る道筋など、かなり熟知していないと、こういうようにはならないということが想像されます。この遺跡では、中から土器が出て来ているものがあるって、大体、縄文時代の前期のものが多かった。

ヤジリ・弓矢を手にするというところから、狩りの説明をしました。

もう一つは、土器ですね、土器を手にしたということですが、日本列島の住人が土器を手にする事になります。

それが何をもたらしたかというところ、これは、食料の範囲が非常に拡大することになるわけです。というのは、縄紋土器というのは、土器の外表面の観察、あるいは土器そのものの表面にこびりついているものの観察をしていくと、煮炊きというものに使われる、簡単にいうと、鍋としてというのが最大の用途といえます。

もちろん、時代が新しくなってくると、煮炊きだけじゃなく、盛り付け用の土器も出てきたり、それからまた、祭りごとに捧げるような、お祭りに使うような土器も想定できますけれども、当初の主要な用途というのは、土器は調理用具だということにあったわけです。

煮炊きができるという点で、簡単に考えられるのは、貝です。普通貝というのは、生きてる貝を捕まえてきて、素手で口を開けようとしてもなかなか大変なところがあります。ところが、お湯の中に入れて、ちょっと煮炊きすれば、自分で口を開いてくれるわけです。加熱をすることができれば、貝自体の調理は非常に容易になりますし、おいしい。貝の調理なんかは典型的で、非常に簡単に調理ができます。貝をたくさん捕りまして、貝塚が形成されますが、貝塚が出てくるのは正に中石器時代以降ですね。

それから、木の実の調理法にも新しい方法というのが出てきます。縄紋時代の日本列島というのは、現在よりもいくらか暖かかったのですが、大量にドングリなどの木の実が産出されたんです。今でもたくさんドングリやクリなんか取れますけれども、それよりもっと大量にあったらうと。

そういうドングリなどの木の実、これはそのままではシブがあって食べられません。しかし、ドングリの中には、煮沸するとシブのアクが抜けるというものもありますし、それからトチノミ、ドングリの中のあるものについては、灰合わせをする、つまりアルカリで中和するということをすると、食べられるようになっていくわけです。

こういうようなことで、食料獲得の方法、その調理の仕方、食べ方というものの変化がある、豊かになってくると言っていっていいでしょう。この灰を取るということの為に、炉の形まで変わったりします。

左上は、これは福島県立博物館の展示室の中にある縄紋時代の復元住居の復元部分の炉の部分ですけども、土器が据えてありまして、こここのところで煮沸して灰をたくさん取ります。

それからこちら 2 枚は、仙台市の仙台市縄文の森広場・山田上ノ台遺跡の展示室のものですが、複式炉というものが使われていますが、ここで煮炊きをする、こっちはただ燃やしています。

こういうような形の複式炉^{かくしきろ}というんですけど、これはわざわざ灰を作るために造るんだというような考え方もありますが、何のために灰を作るのかというと、さきほど言ったようにアク抜きなどにも使うということがいわれているわけです。

こういうふうにして、縄紋時代の人々はかなり自然のサイクルに合わせた生活ができるようになってきました。

狩り、これは冬場に行われている例が多いようです。なんでそれがわかるのかというと、狩りの主な対象となっていたシカやイノシシの歯ですね、これを見ますと、歯の根元に年輪みたいなものができる

す。その年輪を見ますと、その個体がいつ死んだのか、それからどういう季節に死んだのかということがわかります。

それから、貝を採ったのは、春先に多い。これもどうしてわかるのかというと、貝、これは触るとわかるんですけども、アサリにしてもハマグリにしても、表面は、つるつとしていますが、よく触ると凸凹があるんです。それは貝の成長線というものを反映しているわけで、つまり冬は寒いから、ぎゅっと濃縮してきっちり成長していくし、夏は暖かいから間延びじゃないけれど、間隔のある成長の仕方をする。木の年輪と同じです。それと同じようなものが、貝にもあります。それを調べますと、その貝がいつ死んだのか、いつ捕獲されたのか、収穫されたのかということがわかります。

それを見ますと、もちろん貝塚から出土する貝というのは、一年中捕られているんですけども、統計的に処理しますと、春先から夏にかけての時期に捕られた貝が多いということがわかります。

土器作りのことを考えてみますと、これは秋の仕事だろうと想定されます。もちろん、秋だけだったという訳じゃないんでしょうけれども、土器を作るという工程から考えますと、どうしても一定期間陰干しをするというのが必要だということが、実験的に言われていまして、そういうところからすると、乾燥できる時期、乾燥に適した時期という、春先か秋口ですね、特に日本列島の場合には、秋のほうが空気が乾燥しているということなので、土器作りは秋が多いんじゃないかと考えられます。

こういうことを見ていくと、一年間の生活のサイクルというのがほぼ決まっていた、決まった生活ができていたようだ、そういうところから、縄文人は定住的な生活をしていたんだと考えられています。

そんなことを反映したのが、この縄紋カレンダーとされる図です。これはあちこちの博物館などで見る図だと思うんですが、國學院大学の小林達雄さんが提唱したとされますけれども、こういうようにして、縄紋時代の人の生活のサイクルというのを絵の中で見せています。

真ん中に、ハウスキーピングというか、家の中のお仕事、家のまわりのお仕事ですね、家造り・土器作り・石器作り、それから、次の輪の、貝、アサリ・ハマグリなどの入っているところ、これは採集で、海に行ったり、浜に出て、アサリ・ハマグリなどの貝を採ったりします。

輪の幅の大きさは、それよりも、こちらのほうをたくさんやっているよということを示します。

それから、その次の水色のところ、これは海で魚を取る漁撈ぎょろうです。その次の緑ですが、濃い緑のほうは、これは採集です。野山に出て、春は、当然、若芽や木の芽を取り、それから秋になると、先ほど触れた大量に産出されるドングリ・シイの実・クリを採集する。ブドウは、ここまで立派なブドウはないと思うんですけど、ヤマブドウがあります。

それから一番外側は、狩猟ということで、イノシシやシカということですけども、冬場の作業として、こういうふうになっていました。

こうやって見ますと、土器作りや石器作りは、さておきまして、極端に言いますと、現代の我々の生活とあまり変わらないじゃないかということも言えるんです。

狩猟が解禁されるのは都道府県によって違うんですけども、多くの都府県で、イノシシとか、ニホンジカを対象とした狩猟期間というのは、11月15日から3月15日だそうです。まさに冬のさなかですね。

また、日本海側の豪雪地帯では、非常に積雪が多い時にはイノシシがかなりまとまって行動するという習性があるんです。そういうのをうまく見つけて捕まえれば、容易に捕獲できるということもあるんです。

それから、潮干狩りですが、大体、春というか、3月の終わり、子どもたちの春休みぐらいから、5月の連休くらいまでの時期というのは、よく潮干狩りというのがニュースになったりします。これも同じじゃないですか。

さらに、サケ・マス漁ですが、これはサケが日本列島の川に上がってくるのは、秋ですね、秋味といいますから。

マグロがこんなところにいますけれども、マグロの漁、^{おおま}大間のマグロというのは、最近までは7月から10月が最盛期だったそうです。今は、ちょっとはずれていますけれども、もう少し遅くなったりしますと、大体、そのへんでちょうど合っています。

ただ、沖縄の近海マグロというのは、これは5月から7月くらいということでしたけれども。

クジラは、ここでは冬に置かれていますけれども、千葉県の房総半島の南のほうでクジラ漁がありますけれども、それは6月から8月くらい、夏だと思います。

それから、いろいろな点で有名になった和歌山県の^{たいちちよう}太地町の、クジラの追い込み漁は、9月1日が解禁だそうです。

というようにところで見ますと、我々の今の生活もかなり縄文時代と同じところがあると思われるわけですね。現代の我々はもちろん、縄文時代の人たちよりも、はるかに便利な生活をしているわけですが、こういうところを見直して、昔というか、古い時代に思いを寄せるといのも、面白いんじゃないかなと思います。

大体、今日、用意したお話はこのくらいなんですけど、縄文時代の生活のそのほかについてなどは回を改めてお話しさせていただきます。本日はお聞きくださってどうもありがとうございました。

(拍手)

司会：ありがとうございました。本日、最後までご清聴いただきまして、どうもありがとうございました。また次回、お越しいただければと思います。本日は最後まで、館長も皆さまも、ありがとうございました。

申し遅れました。次回は6月25日です。館長講座、次回は6月最終土曜日に行いますので、また、お越しください。